

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 5 年 6 月 29 日現在

機関番号：32652

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

研究期間：2017～2022

課題番号：16KK0037

研究課題名（和文）戦後ドイツにおける空襲記憶の形成・継承の研究 日独比較を通じて（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）the Formation of Bombing War Memory Culture in Post War Germany. From the Comperativie Perspective of Japanese Air Raid Memory(Fostering Joint International Research)

研究代表者

柳原 伸洋 (Yanagihara, Nobuhiro)

東京女子大学・現代教養学部・准教授

研究者番号：00631847

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 6,600,000円

渡航期間： 14ヶ月

研究成果の概要（和文）：本研究は、戦後ドイツにおける空襲記憶の形成・継承について、ドイツと日本とを比較しながら考察しようと試みた研究である。本研究代表者は、数年来ドイツのみならず日本の空襲記憶に関する研究を進めてきた。それを、ドイツにおける研究に照応させ、同時にドイツの学会等で報告することで、ドイツ・日本だけの枠組みに留まらない、「空襲の世紀」としての20世紀の一端を明らかにする意図があった。ドイツ・アウクスブルク大学のディートマール・ズュースを共同研究者として、2019年度には同大学での報告、日本での報告も行い、戦後ドイツ社会における空襲記憶の形成プロセスを、日本の事例を参照しつつ、その特徴を剔出することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究結果は、従来別個に語られてきた、ドイツや日本の空襲記憶の形成プロセスを、「戦後史」の枠組みで対応させながら考察したことである。これによって、日本のみならず、ドイツの研究会にも刺激を与え、20世紀後半の戦災記憶の形成についての新たな知見を得ることができた。ドイツ現地の研究枠組みについて批判的眼差しを加え、同時に日本の空襲記憶の特徴も剔出できた。戦後のドイツ（西ドイツ）と日本は似たような歩みを見せたと巷間では言われるが、実際にはそれぞれが置かれていた冷戦構造の相違点などが、空襲記憶形成に大きな役割を果たしていることが指摘できた。

研究成果の概要（英文）：This research project attempts to study the formation of air raid memory culture in postwar Germany by comparing Germany and Japan. With comparing two nations, this research intended to clarify a part of the 20th century as "the century of air raids," which was not limited to the framework of Germany and Japan. With Dietmar Suess of the University of Augsburg, as a co-researcher, I had the chance to discuss with him and to make the presentation about air raid memory culture in Japan and Germany. Through this, I could identify the formation process of air raid memory in postwar German society, with reference to Japanese cases, as well as its characteristics.

研究分野：ドイツ現代史

キーワード：戦後ドイツ史 戦後日本史 空襲 記憶文化

1. 研究開始当初の背景

本研究費は、2014年度から2017年度まで着手した「東西ドイツにおける空襲記憶の形成（1945～1975年）と連続したものである。同科研費では国際共同研究強化として、前科研の成果を活かしながらも、ドイツと日本とのあいだで、個人間、さらに地域的にも、そして研究上でも両国を往復・往還する試みをおこなった。

以下、本研究が開始された当初の研究の着眼点および論点を挙げておきたい。

- (1) 日本とドイツは、両者ともに第二次世界大戦に空襲の被害を被っている。しかし同時に、両国・両地域は空襲の加害国でもあり、敗戦国でもあるという共通がある。それぞれの国・地域で、本来ならば都市レベルでの地域性と結びつきやすい空襲の記憶の形成について、「グローバル」な視点からの研究を志した。
- (2) 同時に、上記の(1)の状況にあるにもかかわらず、日独比較に着目して、それぞれの特徴を照応させながら考察された研究は存在していない。とくに両者の比較検討によって、各国の研究について批判的な視座を投げかけ、世界的な空襲研究の充実に資すると期待されると考えた。

実際に、具体的には本研究費によって、2019年度にはドイツ・アウクスブルク大学の客員研究員として南ドイツに滞在し研究を遂行した。その後、コロナ禍の影響もあり研究が滞ったことで、2022年度までの研究費の延長をおこなった。2022年度にもドイツに赴き、空襲の記憶文化研究について補完的な調査をおこなった。このような具体地域に根ざしつつ、広い視座から空襲史あるいは空襲の記憶文化研究に貢献したいという研究上の意図があった。

2. 研究の目的

上述の背景と密接に関わりながら、本研究は以下のような目的を具体的に立てた。とくに前科研費からの継承の側面と、今後の研究への橋渡しという側面から意図されている。

- (1) 日本とドイツの空襲記憶の形成についての共通点・相違点を浮き彫りにする。本研究では戦後直後から学生運動の時期までの歴史的な空襲記憶形成に焦点を当て、日本の事例を参照項として、戦後ドイツの空襲追悼式や記念碑建造のプロセスを明らかにしようとした。その際には、背景となる歴史的事象を重ね合わせながら研究することを目的とした。
- (2) ドイツの空襲記憶の背景にある市民社会の成立や民主政に関わる教育などが、記憶文化にどのような影響を与えたかを明らかにすることを目的とした。市民社会の形成は、西ドイツにおいては、ヴァイマル共和国の「失敗」から民主主義をどのように実現していくか、ナチ・ドイツの過去とどのように社会が向き合うかという問題を含んでいた。この点を勘案して研究を行うことは、空襲の記憶文化研究を単なる歴史研究だけとせず、ほかの研究への接続の可能性を高める。これを意図して研究を遂行した。
- (3) 一般的に「過去の克服」と呼ばれるドイツのナチズムの過去との取り組みは、戦後直後の「被害」の語りにおいては、加害が忘却に置かれているとされている。しかし、空襲被害という被害の語りにおいても、その加害性の想起文化がどのようなインパクトを与えてきたかを具体的かつ詳細に分析することを目的とした。とくに、ミュンヘン、プフォルツハイム、ドレスデンなどを例として考えたようにした。ドレスデンは旧東ドイツ地域だが、これもまたドイツ連邦共和国(西ドイツ)の戦災の被害の記憶、つまり空襲記憶に影響を及ぼしている点を重視して研究を進めようとした。

3. 研究の方法

上記の研究目標を達成するために、ドイツで空襲の追悼式典について、文書館資料をもとに本来「郷土史」として研究されていた成果を、地域横断的に、同時に比較的考察した。用いたアプローチは主に歴史学的手法だが、それをアクチュアルな出来事の中で現代と過去とを往還しつつ進めていったことに、研究の方法上の特徴があるといえる。

- (1) 第一に、本科研の研究代表者個人が日独間を往復することで、インプットとアウトプットとのバランスのうえで研究を進めていった。たとえば、ドイツに滞在してアウクスブルク大学歴史学部の客員研究員として、同大学のコロキウムや研究会などで報告して議論を重ねた。これによって、両地の知見を交換することができた。共同研究者はアウクスブルク大学のディトマール・ズースであり、彼の空襲研究プロジェクト同時に、日本の空襲関係の研究会などにも積極的に参加した。たとえば、仙台市・東北学院大学における空襲史に関わる講演会や、空襲・戦災を記録する会全国大会の幹事としての業務や報告を通じて、日独の情報交換していった。
- (2) 第二に、ドイツという現地での調査を、フィールドワーク的にも、文献収集・考察の上でも実行していった。戦後ドイツの空襲追悼式典の調査、文書館での調査をおこない、歴史的なアプローチによって、空襲記憶形成のプロセスを明らかにしようとした。とくにプフォルツハイムやドレスデンでの調査では、周年の空襲追悼式の市長や各団体の代表演説を、21世紀的なアクチュアルな状況との相関で捉える試みだった。
- (3) 最後に、第三の視点を得るためにも、日本の事例についてもフィールドワークを実施した。福島、仙台、秋田などの東北地方を中心として、墓地・記念碑の踏査をふくめ、空襲関連の

博物館展示や空襲体験の証言集などを利用して、ドイツには存在して日本には不在である要素、またはその逆の状況について比較考量した。これは、日本における全国的組織の存在や、ドイツにおける空襲をグローバルな現象、そして現在もなお継続している現象として普遍化している点などが挙げられる。これらは片方には存在しているが、もう片方には存在しないが、その意識が希薄な現象である。

4. 研究成果

研究成果は、本報告内に既述したのものもあるが、研究報告や原稿執筆として公刊されてきたもの、これから公刊されるものなどがある。なお、後述するが、次の研究への接続、そして第二次世界大戦の敗戦国のみならず、戦勝国に関する研究も開始している。そこで、本研究の成果が生かされることになる。

- (1) 本研究成果は、日本のみならずドイツの空襲研究にも刺激を与え、20世紀後半の戦災記憶そして記憶文化の形成についての新たな知見を提示できた。とくに、ドイツ国内・地域にとどまる空襲研究を、日本の特徴(体験証言の全国化やポピュラーカルチャー化)などから俯瞰的に眺めることで、東西に分断されていたドイツの戦後史の特性を勘案しつつ、空襲記憶とその文化形成のプロセスを追うことができ、戦後史という広い歴史的文脈に位置づけることができた。具体的には、この成果を用いて、2022年12月にはドイツ語での日独の研究者による研究会報告をおこなったことなどが挙げられる。
- (2) ドイツ現地の研究枠組みについて批判的な眼差しを加え、同時に日本の空襲記憶の特徴も別出できた。日本に対しては、同様に地域化されている空襲の記憶の枠組みを相対化し、ドイツという他国の事例から、空襲記憶形成のプロセスについて考察するためのヒントを得ることができた。日本では平和学会での報告などが挙げられる。これらは、今後の研究に活かしていく。とくに、1980年代から2000年代という、日本の空襲記憶形成においては重要な時期についての分析を、今後は遂行していく予定である。
- (3) ドイツの空襲記憶形成の歴史と、同時に進行していった「普遍性」の浸透プロセスを戦後初期の段階から確認することができた。この歴史的な積み重ねは、最近のことではなく、文書館資料(たとえばプフォルツハイム市立文書館)によれば、1950年代から議論されている「加害・被害」の論争や、都市復興の議論との連続性のなかにある。これらを歴史的に位置づけた論稿を、近刊の論文集(山川出版社、2023年12月発行予定)に投稿した。そこでは、南ドイツの小都市にある記念碑をもとにして、第二次世界大戦後の空襲の記憶文化形成に関わる研究成果をもちいて論じている。
- (4) 戦後のドイツ(西ドイツ)と日本は似たような歩みを見せたと巷間では言われるが、実際にはそれぞれが置かれていた冷戦構造の相違点などが、空襲記憶形成に大きな役割を果たしていることが指摘できた。この点については、両国の研究の前提を再検討し、比較しつつもそれぞれの独自性について、つねに考慮しつつ、検討を重ねていく必要がある。本研究代表者の今後の研究のみならず、他の研究の方向性にも影響を与える成果を提示できただろう。
- (5) 以上、(1)~(4)の点から、ドイツ・日本だけの枠組みに留まらない、「空襲の世紀」としての20世紀の一端を明らかできたと考えられる。また、それは同時に、現在もなお続けられる空襲についての批判的な視座と、20世紀の空襲記憶とその文化の形成が、陰に陽に現在の平和理念、そして逆に戦争状態の継続性の歴史とも関わっていることを明らかにする鍵となろう。

ただし、コロナ禍の影響は絶大で、個人が日独を移動しつつまとめていく研究という特性上、停滞期もあり、思うように研究は進められなかった。その時期にはインターネットを通じての交流や報告などの工夫をしたが、深度が浅く、十分ではなかった。2023年2月に、ようやく対面での現地調査をドイツ南部で実施できたことは、本研究計画の最後にして、もっとも大きな成果だったと言えよう。その分析・検討は、今後も実行していく予定である。また、戦争の記憶、本科研の場合には空襲の記憶文化について、2020年から数年間のコロナ禍の影響そのものを今後は考えていく必要があるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 柳原伸洋	4. 巻 11
2. 論文標題 ヴァイマル共和国におけるガスマスクの社会史 -総力戦を匂わず道具-	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 世界史研究論叢	6. 最初と最後の頁 43-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柳原伸洋	4. 巻 12
2. 論文標題 モノから想起される二つのノスタルジー -ドイツのオスタルギーから日本の空襲マンガまで	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 コンテンツ文化史研究	6. 最初と最後の頁 86-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柳原伸洋	4. 巻 55
2. 論文標題 第一次世界大戦の空襲が生んだドイツの「銃後（Heimatfront）」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 軍事史学	6. 最初と最後の頁 67-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柳原伸洋	4. 巻 44
2. 論文標題 戦後ドイツの歴史論争に空襲論争を位置づける 「被害者の国家」の形成	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 独語独文学研究年報	6. 最初と最後の頁 251-266
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 9件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 YANAGIHARA, Nobuhiro
2. 発表標題 Zwei Geschichten des Bombenkrieges. Eine Forschung ueber Japan und Deutschland
3. 学会等名 38. Tagung der Initiative zur historischen Japanforschung (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 柳原伸洋
2. 発表標題 ハンブルク空襲とナチ強制収容所：殺害方法の転換による「個の破壊」とその記憶
3. 学会等名 九州西洋史学会2022年度春季大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 柳原伸洋
2. 発表標題 録画インタビュー：空襲・戦災を記録する取り組みのこれまでと未来へのメッセージ
3. 学会等名 第51回 空襲・戦災を記録する会全国連絡会議大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 柳原伸洋
2. 発表標題 ドイツにおける空襲の記憶　ドイツの空襲・戦災記録のあり方の基礎的考察
3. 学会等名 日本平和学会2021年度秋季大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 柳原伸洋
2. 発表標題 庭田杏珠・渡邊英徳『AIとカラー化した写真でよみがえる戦前・戦争』（光文社、2020年）のパブリックヒストリーとしての可能性
3. 学会等名 空襲・戦災を記録する会全国連絡会議・第50回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 柳原伸洋
2. 発表標題 ドレスデン空襲の記憶の変遷
3. 学会等名 米軍資料の調査・活用に関する研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 柳原伸洋
2. 発表標題 Comment about "Upon the Publication of Handbook Digital Public History"
3. 学会等名 Online Event by the Japanese Association of Public History"The Present and the Future of Public History"（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 YANAGIHARA, Nobuhiro
2. 発表標題 Kommentare zur Geschichte vom zivilen Luftschutz in Deutschland und Japan
3. 学会等名 On the Transnational Destruction of Cities（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柳原伸洋
2. 発表標題 空襲の記憶文化 日本とドイツ、「想起」と「忘却」の比較を通じて
3. 学会等名 ヨーロッパ文化総合研究所公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柳原伸洋
2. 発表標題 ドイツ・ミュンヘンでヨーロッパ近現代史を研究する意味 -在外研究の成果と教育上の効果-
3. 学会等名 読史会（東京女子大学）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 YANAGIHARA, Nobuhiro
2. 発表標題 Die Erinnerungskulturen des Bombenkrieges in Japan
3. 学会等名 アウクスブルク大学歴史学部コロキウム・ブロックゼミ（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 柳原伸洋
2. 発表標題 第一次世界大戦と空襲 「新しい軍事史」を踏まえて
3. 学会等名 日本クラウゼヴィッツ学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 柳原伸洋
2. 発表標題 パブリック歴史の実践と考察 長崎の「ダークツーリズム」を例に
3. 学会等名 パブリック/歴史研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 日本平和学会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 法律文化社	5. 総ページ数 204
3. 書名 戦争と平和を考えるNHKドキュメンタリー（柳原伸洋「空襲への想像力をもつために」）	

1. 著者名 石田勇治、佐藤公紀、柳原伸洋、宮崎麻子、木村洋平	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 744
3. 書名 ドイツ文化事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	ズユース ディートマール (Suess Dietmar)	アウクスブルク大学・Neuere und Neueste Geschichte・Professor	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ドイツ	アウクスブルク大学			